

I 若手研究者ワークショップ開催

極東地域研究センターでは 2022 年度からスタッフが入れ替わり、また、新しい大学院である持続可能社会創成学環グローバルSDGsプログラムの教育にセンターのスタッフ全員が関わることになったのを機会に、若手研究者の交流の場を設けようということになりました。研究分野の異なる研究者が寄り集まって、異なる視点や着想から意見を交換する場になることが期待されます。その第一弾として、8月4日に若手研究者ワークショップ・シリーズ第1回を開催しました。

第1回目のワークショップでは、国連大学サステイナビリティ高等研究所 (UNU-IAS) の博士課程最終年度に在籍するカマルディーン・ユシフ (Kamaldeen Yussif) さんに極東地域研究センターにお越し頂きました。ユシフさんの報告論題は、Urban Expansion in Ghana: The Impacts on Local Peri-urban Communities, and Pathways to Sustainability (ガーナの都市拡大: 都市周辺コミュニティと持続可能性への道筋) でした。この発表では、特に、アフリカ地域における都市拡大に関する論文を Scopus と Web of Science から抽出し、従来の研究がどのようなテーマに取り組んでいるかを体系的レビューによって明らかにしようとするものでした。それにより、アフリカ地域における都市人口の急速な増加、それに伴う住宅不足、土地管理の複雑さなど、多様な要因の組合せによる都市の持続可能性の効果的な、そして合目的な対策を提案しています。

参加した極東地域研究センターのスタッフからは、体系的レビューの方法論に関する質問のほかに、ガーナの農村地域における土地登記やコミュニティの首長による土地分配などに関する具体的な質問が飛び交い、ユシフさんが丁寧に答えていらっしゃいました。せっかくの機会なので、持続可能社会創成学環グローバルSDGsプログラムの院生さんにも質問を促すなど、若手研究者ワークショップにふさわしい場となりました。センターでは、今後もこうした活動を続けていきたいと考えています。



写真：右端がユシフさん

(文責：Geetha Mohan, 堀江典生)

II イベント「ひまわり迷路」開催

極東地域研究センターでは、持続的可能社会創成学グローバルSDGsプログラムと連携しつつ、有機農業研究プロジェクトを進めています。有機農業は、生物多様性や私たちの暮らしの多様性を高めるとともに、農業を新たな地域の成長産業とし、同時に、地域の豊かな景観を生み出すSDGs時代の新たな挑戦と位置づけられます。このプロジェクトでお世話になっている八ヶ山ベジラボ、そして、ダイバーシティとやまと共催して、有機農業を考えるイベント「ひまわり迷路」を9月10日に開催しました。イベントにはたくさんの家族連れのお客さんが訪れ、ひまわり迷路に挑戦したり、グローバルSDGsプログラム院生の檜垣椋君の有機農業に関する研究発表を聴いたり、八ヶ山ベジラボ杉林外文さんのお話を伺ったりと、あっという間の2時間が過ぎました。報道各社も取材に訪れ、当日のテレビのニュースや翌朝の新聞で報道されました。



写真：大学院生の発表の様子



写真：ひまわり迷路を探索する来訪者

(文責：堀江典生)

Ⅲ イリーナ・クズネツォヴァ氏の特別講義

2022年2月24日から始まったロシアによるウクライナ再侵攻は、はや、半年以上も過ぎました。ロシアのリベラル派の経済学者は政権から遠ざけられ、動員経済や戦時体制経済を声高に主張する政治家や経済学者が目立つようになってきました。一方で、孤立するロシアの現状を憂う人々は確実にいて、政権への不満も散見されるようになってきました。

富山大学経済学部において私が提供する講義「ロシア経済論」には、例年の2倍以上の学生さんたちが受講し、この戦争に対する学生さんたちの関心の高さを表しているように思いました。この授業のシラバスは、ロシアのウクライナ再侵攻の前に作成されたものでした。そのため、授業を始めるにあたり、大幅にシラバスで記載されている内容を変更し、ロシアのウクライナ再侵攻に関わる諸問題についてお話しすることを了解いただき、講義を行いました。

ロシアのウクライナ再侵攻が開始されて間もない2月27日に、ニューヨークタイムズ紙にバーミンガム大学のイリーナ・クズネツォヴァさんの執筆した”This War is Not in My Name”と題する記事が寄稿されました。私の講義の受講生には、授業内容の理解のうえに立って、この論文の翻訳とこの記事の解題を課題として求めました。イリーナさんは、ロシア出身の社会学者で、これまで移民問題、強制移住や都市問題に取り組み、最近では、ロシアのウクライナ再侵攻前から戦争状態にあったウクライナのドンバス州におけるフェミニスト・アートの実践に着目した研究などを行っています。イリーナさんと私は旧知の仲でしたので、彼女の記事を授業で利用していることをお話しすると、是非、学生たちに話しかけたいとの申し出があり、オンラインでイリーナさんに特別講義をしてもらうことになりました。

時差のせいで、ご自宅のイギリスは早朝だったにもかかわらず、スライドをしっかりとご準備いただき、熱心に学生たちにロシアの犯した過ちとロシア市民の動揺や抵抗について、お話しされました。

学生からは、この戦争に対して日本および富山で学ぶ自分たちは何ができるのかとの質問に対し、欧州が多くのウクライナ難民を抱えるなか、日本もまた難民受け入れを積極的に行うべきであること、そして、学生としてこの戦争から多くのことを学び考えることが、ウクライナにとっても大切であることなど、丁寧に答えていらっしゃいました。



写真：当日のイリーナさんの講義の様子

受講生にとって、この戦争をリアルに感じ、考えさせられる特別講義になったものと思います。

(文責：堀江典生)

Ⅳ 若手研究者富山日誌：おわら風の盆

9月最初に、2年ぶりに復活した「おわら風の盆」を初体験しました。富山に来る前には長い間関西に住んでいましたので、このイベントを初めて聞いた際に頭に浮かぶのは、「なぜお盆は9月なの」という質問でした。調べてみたら、9月1日は旧暦の八月朔日に由来し、この時期がちょうど台風のシーズンと重なるため、「おわら風の盆」はこの風を鎮めることを祈る踊りとされています。面白い歴史に加えて、同僚の子供たちも参加している八尾地方ならではの行事なので、期待しながらイベント最後の日に訪れました。

18時ごろに越中八尾駅に降りてから雨がやみ、思ったよりも混雑していませんでしたので、運が非常に良かったです。まず諏訪町のライトアップ目指して歩きまして、周りの橋をうろうろしておわらをイメージした



写真：編笠デザインの街路灯

デザインをたくさん発見しました。橋を渡り、細長い坂を上がりますと、ようやく石畳と格子戸の町並みは目に見えました。日本でそういう町並みは珍しくありませんが、高く積み上げられた石垣に囲まれて坂の町を歩きながら昔の山の生活を少し味わえたのは独特な体験だと思います。19時ごろにおわらがスタートし、地方で何百年も続く伝統芸能ですが、私たちににとっては服装も踊りも新鮮で印象的でした。諏訪町を楽しんだ後に、20分程度歩いてエリアのもう一端の天



写真：天満町のおわら

満町まで行きました。途中でいくつかの町を通り過ぎましたが、それぞれの町が舞台になり、服装とやり方が微妙に違いますので、その趣と工夫が感じられました。天満宮付近で観客が集まり、20時頃から輪踊りが始まって近くで見られました。観客も普通に参加していましたので、一緒にお祭りの気分になりました。

実はこのイベント開催前後にも、センターにいる八尾の住民たちがおわらの話でよく盛り上がりましたので、地域への愛着は魅力的な自然景色と美味しい食べ物以外に、地域のアイデンティティとなる伝統行事にもよるものだと感じています。

(文責：楊潔)